

第 17 回 都市計画道路殿町羽田空港線ほか
道路改築工事に関わる河川河口の環境アドバイザー会議
(令和 5 年 3 月 23 日開催)

主な意見・指摘事項と対応について

1. 第 16 回アドバイザー会議 指摘事項の確認

意見・指摘事項	対応
特になし	-

2. 多摩川スカイブリッジ開通による効果

意見・指摘事項	対応
特になし	-

3. 令和 4 年度定期環境モニタリング調査（秋季・冬季）の結果及び
令和 4 年度環境モニタリング調査報告書（案）について

意見・指摘事項	対応
<水質・水象> ♦ 底層の溶存酸素量（DO）の環境基準値（2mg/l 以上）が示されているが、調査地域では該当しないのではないかと。	♦ 多摩川では、底層の溶存酸素量の基準値は本来適用されないが、貧酸素化に伴う水生生物への影響を把握するため、本基準値を準用しています。
<地形> ♦ 今後起こり得る自然変動によっても、洗掘が解消しない可能性はどのくらい高いか。	♦ 大きな出水が無い限り、洗掘が解消することは無いと考えます。局所的な地形変化はやむを得ないものとし、埋め戻し範囲とその周辺で底生生物相に変化が無いこと、また干潟全体の干出範囲が東日本台風の出水後から回復傾向にあることで評価していきます。
♦ 今後、起こり得る自然変動によっても、地盤高低下が解消しない可能性はどのくらい高いか。	♦ 「沖側への土砂の流失」について、R4.5 月と 10 月を比べた場合、流失が大きく進行していないため、次年度も経過観察を継続します。 ♦ 「地形の変化」は問題視せず、埋め戻し範囲とその周辺で底生生物相に変化が無いことで評価していきます。

第17回 都市計画道路殿町羽田空港線ほか
道路改築工事に関わる河川河口の環境アドバイザー会議

(令和5年3月23日開催)

3. 令和4年度定期環境モニタリング調査（秋季・冬季）の結果及び
令和4年度環境モニタリング調査報告書（案）について（続き）

意見・指摘事項	対応
<p><地形></p> <ul style="list-style-type: none"> 「No.3～No.6+60mでは H29.7月の測量実施時の地盤高と同程度、もしくは高くなっている。橋脚の存在によるものと考えられる」とあるが、橋脚よりはやや離れている。別の要因は棄却され、本当に橋脚の影響と判断できるのか（後流の影響？）。理論計算などから、橋脚の影響が当該場所に及ぶものかどうかを確認すべきである。 	<p>（委員からの発言）</p> <ul style="list-style-type: none"> 橋梁による後流の予測は比較的容易にできるが、それによる地形変化を予測することは困難である。また、底質がシルトの予測は難しく、理論計算にも限界がある。引き続きモニタリング調査を行い、経過観察を行うことで良いと思われる。
<ul style="list-style-type: none"> 橋脚の下流側で底質の一時的な変化が生じていることから、地形はまだ安定しておらず、出水時には動き続けると思われる。橋脚の直上流の地形変化は、橋脚の影響を受けているものと考えられるが、それ以外の場所では、橋脚がどの程度影響を与えているのか不明である。 	<ul style="list-style-type: none"> 次年度も経過観察を継続します。
<ul style="list-style-type: none"> 参考資料の「台風等発生状況と干潟干出範囲の経年変化」のグラフについて、降水量は、河川上流で降った雨の影響も出てきてしまうため、影響の判断が難しい。できれば水位や流量で整理できると良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ご指摘を踏まえ、適切に修正します。
<p><植物></p> <ul style="list-style-type: none"> 橋梁によるヨシ群落への影響範囲がどの程度か視覚的に把握するため、橋梁下全体が写る写真を撮影できると良い。 	<ul style="list-style-type: none"> ご指摘を踏まえ、今後の調査で橋梁下全体のヨシ群落の状況が分かるように写真を撮影します。
<p><鳥類></p> <ul style="list-style-type: none"> 冬季は確認例数が少ないので評価しにくい部分はあるが、バードストライクも発生していないことから、現時点では鳥類の飛翔阻害への影響はないと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続きモニタリング調査を行い、経過観察を行っていきます。

第 17 回 都市計画道路殿町羽田空港線ほか
道路改築工事に関わる河川河口の環境アドバイザー会議
(令和 5 年 3 月 23 日開催)

3. 令和 4 年度定期環境モニタリング調査（秋季・冬季）の結果及び
令和 4 年度環境モニタリング調査報告書（案）について（続き）

意見・指摘事項	対応
<p><魚類> 特になし</p>	-
<p><底生生物></p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 「R3.7 月の埋め戻し後、No.10+80m, +120m 及び No.11+80m, +120m では、確認個体数が少なく、主にイトゴカイ科やムロミスナウミナナフシなどの多毛類が確認された。これらの地点について、浚渫前の H29 年度秋季は、多毛類のほかに貝類や節足動物が確認された割合が高く、現時点では浚渫前の底生生物相には戻っていないと考えられる」とあるが、加入のタイミングから、あと 1-2 年は待つ必要があるか。 	<p>（委員からの発言）</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 貝類や節足動物が少ない状況は東京湾全体の問題であり、今後もこの傾向は続くと考えられる。引き続き、経過観察が必要である。
<p><底質></p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 底質と地形の地点位置図を重ね合わせた上で、課題となるような箇所を抽出し、それらの関係性を整理すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ ご指摘を踏まえ、底質と地形変化との関係性を整理し、考察します。
<p><モニタリング調査報告書></p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 環境モニタリング調査報告書（案）では、干潟埋戻しの効果が 1 年間でどの程度あったのか、地形や底質の変化、生物の生息状況等を踏まえた考察がほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 総括部分に考察を追加いたします。

4. 令和 5 年度事後調査計画について

意見・指摘事項	対応
<ul style="list-style-type: none"> ◆ 特になし 	-

以 上